

これは、狐のしわざであると思つて、このお包みは孫たちの土産だから、おまへたちにやることはできないぞとひとりごとをいいながら、土産の包みをしっかりとかかえて何事もなく家に帰り着いたことがあつた、と寝ものがたりて聞かされたことを覚えてゐる。曾祖父は酒を呑まなかつたせいもあり難をのがれたのであろう。その後、壇九郎狐のいたずらは何も聞いていない。

三、四十年前の話である。街のある部落から上江花に嫁に来た人があつた。結婚式も無事終り、嫁様が膝直しに里に行き、嫁様を送つて来た父親は、うす暗くなつた帰り道土産を背負つて一里壇の辺まで来たまま行方不明になつてしまつた事件があつた。

嫁さんの部落の人々や江花の人々も総出で捜しまわつたが、容易に見つけることができなかつた。ようやく一里壇北側の山の裏にある小さな沼の中で、死体になつて見つかった。

当時は壇九郎狐の仕業であるとのうわさでもつばらだつた。この父親は酒が好きだったのでこのような難にあつたともいわれている。

(話者 加藤忠太郎)

## 一里塚の寝狐

### 《下江花》

長沼の西、江花に行く途中に、一里塚があつた。ここに狐が住んでいて、夜になると塚より出て、往來の人を迷わしたといわれる。この狐は人を化かす時、「寝だか、寝だか」というので誰いうとなく、一里塚の寝狐と呼ぶようになった。